



日本列島の地殻変動-新しい見方から-

木村敏雄著, 愛智出版,
B5判, 484頁, 定価9,800円(税別)
ISBN4-87256-409-X

日本の構造地質の研究分野で大きな足跡を残された著者が80歳を記念して上記の大部の著書を物されたことにまず大きな敬意を表したいと思います。外国では60・70歳を過ぎてからも旺盛な研究活動が続ける地質屋は少なくありませんが、まったく遜色のない研究意欲の現れは賞賛に値すると思います。しかも本書は単に若い時の研究の総集編ではなく、副題にあるように新しい見方を提示している点が高く評価されます。

著者もいうように、従来の定説と異なる結論、たとえば「多数の地変の系統的な統合としての造山運動はない」「傾斜不整合の有無は顕著な地殻変動の有無を必ずしも意味しない」「付加体と日本でふつう呼ばれているものは“大洋堆積物”の付加体ではない」「三波川変成帯はサブダクションによって生まれてはいない」「秋田油田褶曲帯の褶曲は地殻上層部に働く広域水平圧縮応力によって形成されていない」などには、当然反論・異論があることと思われまふ。著者が第一に言いたかったという「日本は“変動帯”に属するといわれるけれども、断層活動や火山活動が起こることを除けば、10万年程度の長期間をとっても、地盤はかなり安定している」にしても、うがった裏読みをする読者もいるかもしれません。しかし、著者が掲げた詳細な証拠・推論をきちんと検証して議論を深めることはあとに続く構造地質学研究者の責務でしょう。

本書の内容は膨大かつ多岐にわたり全容を紹介することは困難です。まして、逐一評価することは不可能に近いので、ここではごく簡単に示唆するにとどめたいと思います。

第1章の「地殻変動の長期将来予測の論理」では、近年関心を集めている放射性廃棄物処分に関わる地質現象の長期将来予測の論理について述べられています。著者の提示する数値予測値である事象値とその変化から説き起こされ、概要的な地質構造形成や地殻変動のありようについて著者の見解が記されています。

第2章「地殻変動と時間」では、地殻変動の継続



時間をしらべ、それと地質現象の変遷について、陸棚・堆積区・盆地などをキーワードに日本列島全域を俯瞰・検証し、本章の簡単なまとめとして2.9で、上述した「造山運動は存在しない」といった結論を提示しています。

第3章「重力異常をつくった地殻変動：特に中央部日本の負重力異常」では、構造地質学における重力異常調査の有用性を中央部日本を対象に検討しています。本書の大きな特徴でもある章で、ある意味で伝統的な地質学者が重力異常をどのように解釈するか興味深いものがあります。評者自身感じていたことでもありますが大規模な地質構造の解釈は当然深部の構造をあわせ考察し、運動としてはマグマ活動の力学的影響も加味しなければならず、重力構造の解析は地質屋と地球物理屋との共同作業がもっとなされていい課題であります。独力で、それに切り込まれた著者のご努力に改めて敬意を表する次第です。

しかしながら、著者も言及されているようにとにかく読みづらいので、読者は土地勘のある地域の記述から入っていくことも一法であります。欲をいえば、筆が走りすぎて著者のいわんとする概念・モデルがすぐにイメージとして浮かびにくいので、まして必ずしも地質の専門家でない土木関係者に理解をしてもらうためにも、もう少し模式的な図表を入れられたらと、ないものねだりをして筆をおきます。関係者の一読・再読をお勧めします。

(産総研 東北センター 加藤碩一)